

## 「満員電車」に乗った子どもたちを救う

～意図的集団づくりをすすめよう～

学級で生活する子どもたちは「満員電車に乗っている状態」である。

その要因は以下の二点。



一点目は、子どもたちが持つ心情。満員電車で痴漢などのトラブルに巻き込まれたくないと思うように、子どもたちも、いじめなどのトラブルに巻き込まれたいと思っていない。そのため、友達との距離や自分を表現することに気を遣いながら生活している。また、満員電車でのトラブルを運転手が解決できないように、学級で起こったトラブルの解決を教師に期待しておらず、むしろ、教師が入るとトラブルが大きくなるという意識を持っている。

二点目は、学級集団に関する懸念。満員電車は、それぞれに別の目的や行き先がある人の集まり、「集合体」である。集団遊びが減少し、地域のつながりも希薄化している現在、学級がまとまりのある「集団」ではなく、寄せ集めの「集合体」になりつつある。教師が、児童生徒に個別の役割を与え、個人責任を重視することも子ども相互のかかわりを薄くし、集合化を進める一因である。

そんな満員電車に絶えられなくなった子、実際にトラブルに遭った子が電車から降りる。それが不登校である。昔は、電車から降りようとする友達を引き留めるつながりがあった。しかし、「集合体」である現在はそれが無い。

このような現状が自然に改善されることは期待できない。そこで、個々の子どもたちに対し、自分をどう表現すればよいのかといったスキルを高めるとともに、協同的問題解決学習(ペア学習)やピアサポート等を通して、意図的に集団づくりを進めることが教師の仕事である。居心地のよい学級「集団」を作ること、それが、「学習への興味・関心」を高めることにもなり、「学力向上」をも実現していく。

(平成24年度教育相談指導者養成研修  
「効果的な教育相談の進め方」栗原慎二より)

あらためて教師の役割の大切さを認識することができました。子どもたちの社会的スキルを高め、意図的に「集団」を作るという観点から、学級経営のあり方をもう一度見直す必要があると感じました。



## 「子ども健康教育相談」から

「適応促進に向けて」

就学時健診の時期です。

当相談では来所された保護者の方に聴き取りを行います。その際、家庭の状況や生育歴など以外に、就学時健診時の指摘の有無を尋ねます。

しかし、不適応状態と思われる子の場合にも、「特に指摘は受けなかった。」との答えが返って来ます。

就学予定児の中には、集中力の不足や多動性、固執性が感じられたり言語表出や指示の理解などに課題を抱えたりするような子もいます。

健診時の表情・行動観察で得た様子や受診歴、巡回・移動相談や相談機関への相談の有無、また、幼保との連携で得た情報などは、就学児一人ひとりの適応促進のうえで大変参考となります。



## 子どもたちの心のケアについて

=多面的な情報収集で、きめ細やかな対応の  
実践例から=

震災前からも行っていたが、生徒の出欠状況や健康観察、教育相談、学校生活での友人や教員とのやりとり、心理検査、家庭の様子などについて、震災後は徹底して行き、多面的に情報を集める。そのうえで、教員が自問自答したり、教職員間で議論するプロセスを重視し、きめ細やかな対応に取り組んでいる。

「非常災害時の心のケアシンポジウムから」

情報収集

トラウマの恐怖、喪失の悲しみを経験すると

- ① 神経が高ぶってイライラしやすい。
- ② 「なぜ、自分がこんな目に」という怒りが心の底にある。
- ③ 余裕がないため、いつもなら対処できることができない。
- ④ 喪失の悲しみを別のもので埋めようとする。
- ⑤ どうすればよいかなど方法を知らない。

など、思春期に起こりうる問題行動が起こりやすくなる。



- 児童生徒の言動が、震災におけるストレス等からくるものと考えられる場合は、ネガティブな気持ち、マイナスな考えになっている心を、整理するチャンスと捉え、ストレスへの援助の視点をもつことが大切である。
- 早期対応をするためには、チームとして「気になる」という態度を磨き、教職員間のズレを感じた時に対応できるシステムをつくること、それぞれの教職員の持ち味を生かした対応ができるようにすることが大切である。

【日常生活・災害ストレスマネジメント教育、教師とカウンセラーのためのガイドブック】富永良喜・竹中晃二著書(サンライフ企画)引用